
KIZUNA

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KIZUNA

【Zマーク】

Z3966F

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

私は膝を抱えいつも幸せを探していた。

魔王ピーシアと勇者クーランの話は案外有名で。種族を越えた愛だなんて言われてて。

勇者クーランが当時恋愛感情を持つてたかだなんて昔の話すぎてピント来ない。
でも当時の残ってる日記みたいな書物にはピーシアの感情は書かれてる。

「私はこの人間を愛してしまった。」

一世一代の恋つてこんなのを言つんだろうね。

私もそんな恋がしてみたい。

でも特異体質だから誰も私のこと好きになってくれないんだ。

私が生まれたのは寒い寒い冬の日だった。

瞳が魔族と同じ紫色だったから捨てられたと聞く。

魔族は魔王ピーシアのお陰で終焉を迎えたかに見えたけど。
実はそうじやなくて单なる「氷河期」に入っただけだった。

魔王自体の血は消えたけど。

雑魚の血は残つていて。

そしていつの頃だったか。

純粹な魔族は減つたけど。

半魔族が増え始めた。

端的に言えば人間と魔族の間の子が増えたんだ。

争いごとを好まず出来ればカスミを食べて短命だつたら良い。

口癖のように魔王ピーシアは言つてたつて。

そんな私に優しくしてくれるのは孤児院の園長先生ぐらいで。本当に私って愛されない星の下に生まれたんだなつて実感するんだ。

「コリシア。」
名前を呼ばれた。

「はい。なんですか？」

「経営難で此処を置まないといけないかも知れなくなつたんだ。」

それは予期せぬ話で。

「それでもう高校生にもなるコリシアから此処を出てもむづつ準備をしないといけなくなつちゃつて。」

済まなそうな園長先生の顔は疲れからかやつれていた。

私はそんな事にも気づかないぐらい疎かつたのかと自分を責め。

「…判りました。早急に出て行く準備しますから。」

「コリシアは何にも望まないんだな。」

諦める事に慣れてる私は多くを望まないんじやなくて。

「望んでも叶わないのなら望まない方が傷つかないで済むから。」

それは生きていく術で。

「コリシア。」

きちんと名前を呼んでくれるのは園長先生だけだつたから。

「ごめんな。」

そして私なんかに優しくしてくれて。

私なんかにきちんと謝つてくれるのだつて園長先生しかいないから。

「大丈夫です。私ももうそろそろ一人暮らししたいなつて思つてた
んです。」

丁度良かつた。踏ん切りがついて。「

嘘。

本当はここにずっといて。

死ぬまでずっとここにいて。

優しくしてくれる人が一人で良いからいてくれたら。
多くは望まないから。

学校での嫌な事だって耐えられるって思つてて。

紫色の瞳でも自分の事愛せるかもしれないって思つてた。

甘かつたね。私。

足搔いても仕方ないから諦めるけど。

でもどうしたら良いの?

これからどうやって生きていけばいいんだろう?

「今までお世話になりました～。」

心にも思わず。

私は挨拶をしてトランクひとつ抱え孤児院の玄関にいた。
そんな私に園長先生はかける言葉がなくて。

済まなそりに俯いた。

「大丈夫です。私もうオトナダカラ。」
嘘。

本当はその手に縋りつきたいぐらい惨めで。

本当は私のことみんなと同じように捨てるの?って。

やつぱり園長先生でも私の紫色の瞳が気味悪かったの?って。

その肩を揺すつて聞きたかった。

だけど出来なかつた。

だって私大声あげて泣いてしまいそうで。

愛されないから愛され方も知らなくて。

だけど小さい時に捨てられた私に救いの手を差し延べてくれたのは
紛れもなく園長その人だつたから。

可愛くない私を此処まで育ててくれて。

きつと感謝しないと罰が当たる。

「園長先生はこれからどうするんですか?」

やつと紡ぎ出した言葉は。

思いやりを持った言い方だつた。

「多分。私も野宿かな…。」

私はその言葉を聞いて。

重大さを知った。

立ち上がり触れたかつた園長先生の肩は細かつた。
気づいてみれば私の方が背も高くなっていた。

「先生？ 私を救つてくれて有難う。」

「ずつと言いたくて。

ずつといえなかつた言葉。

「私住所が決まつたらすぐに連絡するから。
だからそれまで頑張つていて？」

本当は私が孝行をする番なのに。

私の台詞を園長先生が取つちゃつた。

「私ね。先生。此処では幸せだつたよ？」

伝えたかつた言葉の半分もきつと言えなかつたけど。
伝えたかつた。

紫色の瞳でも園長先生は愛してくれたつて。
此処だけでは幸せだつたよつて。

でもそれは私の自己満足に過ぎなかつた。
もつと早く気づいてればこんな事にならなかつたのに。

優しい嘘 偽りの姿 1

本当は。

本当は魔族狩りが魔王ペーシアの時代みたいに始まつたんだって。
知らなかつた。

魔族と人間の間の子が手を焼くほどに増えたんだって。

私のように瞳が紫色の子も。

誰かのように皮膚が緑色の子も。

魔族狩りの対象になつたんだって。

園長先生は魔族狩りで命を落とす事になるであらう可哀想な瞳の色
に生まれた私を哀れんで。

周囲に気づかれないように逃がしてくれたんだ。

私がその事が判つたのはどうにも宿が見つからずさまよい歩いて。
孤児院のそばを通つた時の事だつた。

激しい怒声が響いて。

私は竦んだ。

何なの？つて。

だつて此処は平和なはずだつたから。
でもはつきり聞こえた。

「ユリシアを何処へ隠した？」

声高く叫ぶような男の人の声。

そして姿は見えないけれど園長先生の静かな声が聞こえた。

「遠くへやりました。魔族狩りが始まるだなんてあの子には可哀想

過ぎるから。」

「……お前。」

「逃亡帮助は重罪だぞ？？」

「判つてます。だけど。

だけど私は命賭けてあの子には生きて欲しかった。」

園長先生！――

叫びたくなつた。

それをぐつと堪え。

「政府の決定は絶対なのにか？」

「それでも。

それでも私は屈しないから。

いくら私を責めても何もでない。

私だつてあの子の行き先は知らないんだかつ――――――

ケンノフリオトサレルオトヲキイタ……

「全ぐ。何てばあさんだ。」

男の声が響く。

「命かけて守つても何にもならないのに。

おい。死体片しどけよ。」

何かを引きずる音がして。

私は吐き氣がした。

頭痛がする中でわかつたことは。

私は園長先生に最後まで守られたつてこと。

私のせいで園長先生が殺されたつて事だった。

優しい嘘 偽りの姿 2

私の瞳は紫で。

だけど誰にも迷惑をかけるつもりもなかつたし。

ましてや私のせいで園長先生が命を落とすだなんて思わなかつた。

「全く最後の最後で意地を張りやがつて。」

声が聞こえる。

「全くだ。何の為に孤児院の資金を援助してやつてきたか判らない。魔族狩りが始まればすぐにユリシアを引き渡すと契約してたはずだ。」

「あーあ。契約も不履行かよ。」

ガーンと何発のも銃声も聞こえた。

「銃の弾だつてバカにならないんだぜ？」

ギヤハハと品のない笑い声と共にまた銃声が聞こえた。

「よつ。ばあさん。これぐらいすれば死体が上がつても身元もわからぬだろう？」

「顔もうちょっとめちゃくちゃにした方がよくね？」

：頭が真っ白になつた。

園長先生が殺されて。

死体はめちゃくちゃに？

ユルサナイ。

ゼッタイニユルサナイ。

頭に私の声とは別の声がした。

そして。

そして。

私はトランクを置いてゆつくつと声がする方へ向かつたんだ。

此処で私は捨てられた。

孤児院の桜の木の下に生まれたばかりの私は捨てられてた。
そこへ通りかかったのが園長先生その人だつた。

よく覚えてるよ。

あなたが愛され方を知らない私に愛し方を教えてくれたこと。
慈しんで私を育ててくれた事。

よく覚えてるよ？

でもね。

今はそんな事どうでも良くなるぐらい復讐に燃えてしまった。
きっとあなたは自分の死を私が引きずらないようにと祈つただろう
けど。

でも私。

こいつらだけは許せない。

「！！お前！！！」

「ユリシア！！」

相手は三人だつた。

銃を持った奴が二人と剣を持った奴が一人。
よく見ると防衛省の職員で軍隊だつた。

そしてそいつらの足元に園長先生の亡骸が無残な姿で転がつていた。

「このはあさんもお前のせいで死ななきやならなかつたんだ。

「うちへ來い！！」

悪びれた様子もなく銃を持つたうちの一人が私の腕を引いたから。

私は瞬間襲い掛かった。

今まで武道の経験も何もないのに。

驚くほどに体が動き。

瞬殺だった。

そして後悔する。

血塗られた手はもう元には戻らない事。
嫌というほど知ってるから。

殺人という最も重い罪をこのとき背負つたんだ。

私が殺めた軍隊の三人と同じ罪を背負う事になつたんだ。

聖水

園長先生の亡骸は冷たかった。
顔もぐちゃぐちゃにされていた。

優しかった園長先生は私に優しい嘘をついてくれた。
それは私のことを可愛がってくれていたから。
嘘はいつもいけないと教えるけど。
優しい嘘は吐いてもいいと。

人が助かる嘘なら吐いてもいいと。

「ユリシア。此処へ来なさい。」「

1番最初に言われた言葉は。

「ユリシア。今日からお前は此処の住人だ。」

「ユリシア。学校で色々あるだろうけど私はいつでもお前を信じてるからね。」

きつと。

私を拾つて育てると決意した時。
尋常ではない反対にあつただろう。

心労が尋常でなかつただろうと思うのは。

私を拾つてから園長は何だか早く年を取つてしまつた気がするから。

「ねえ？園長先生。

私を守るためだつたんだ？」

経営難も嘘じやなかつただろうけど。
涙で前が見えなかつた。

血塗られた手で。

私は園長の亡骸を抱きしめた。

その時だった。

背中に痛みが走つて。

振り向いたら軍隊の援軍が私に向かつて発砲したのが見えた。

私は魔族の間の子だから。

銃では死ねない。

紫色の血を流して立ち上がる。

その時。

聖水をかけられて意識が飛んだ……。

「聖水にだけは近づいたらダメだよ。」

園長がいつか言つた言葉は。

本当だつた。

聖水。

近年発見された魔王ピーシアが生きてる時代の産物。

聖水は魔族の命をも溶かす神聖な水。

逆に人間にとつてはありがたい奇跡の水。

「瞳の色ってね。」

いつか聞いた園長先生の言葉は私にとつて救いだつた。

「瞳の色ってね。血の色が映るんだつて。

だけど私はそんな事関係ないと思うよ。

ユリシアの色が紫だつて私は大好き。

様は心の問題なんだから。

ユリシアの色が普通でも悪い心を持てば私はユリシアの事嫌いになるだろ?」

「

「だから覚えていて。

誰があなたの事嫌つても私はあなたのこと大好きだつて。
それだけでみんなのことも許して？」

だつてね。先生。

みんな私のこと気味悪がるの。

何も悪いことしてないのに病原菌扱いして。

紫がうつるから近づくなつて。

だから私は魔王ピーシアみたいになりたかつた。
きっと短命なことを願つてカスミだけしか食わず。
だけど無理だつた。

人を殺めてしまつた。

もう後戻り出来ないよ。

復讐心だけ人一倍で。

なんて弱い私の心。

きつとクラスメイトは言つんだろう。

マスクの質問に。

あいつなら紫色の瞳をしてるからきっと殺人罪犯しても不思議じや
ないつて。

「全く何てことを。」

そんな声が聞こえたのは薄暗い部屋の中だった。
きつと牢屋がなんかで。

私の腕には手錠がかかっていた。

「……！……！」

撃たれた背中が痛かった。

だつてきつと。

私はこの血塗られた手を見れば判るだろうけど。
殺人罪は免れない事は明確だつたはずだから。

「動かない方が良い。」

瞳を上げると門番みたいなのがこちらを見て。
無い。

そう思つたけどきつと無駄だつから言わなかつた。
言葉に出さなかつた。

どうせ殺されるのに。

中途半端に生かしてて。

どうせなら一思いに殺して欲しかつたのに。

「口サナナイヨ。

頭の中で声が響く。

私の声じゃない何か。

「止めてくれる?」

私は苛立ち。

目の前の門番に食つて掛かつた。

ナニガ?

だつて直接私の神経に触れるみたいに。
気が触れそうだったから。

「何を騒いでいる?」

いきなり声が聞こえた。

目の前の奴じゃない方から。

目を向けるとそこには一際立派な鎧を着た騎士みたいなのが立つて
いた。

「騎士団長! !」

目の前の奴が声を上げる。

相変わらず頭の中に響く声は。

シオラシクシテレバコイツハノウナシダカラタワイモナイカラ。

そう言った。

アザムクノハカンタンダカラ。

「気が付いたか? ユリシア。

園長はお前のせいで死んだんだ。

これからはちゃんと俺たち人間の言ひ事をよく聞くように。
俺たちの言つまま動けばお前も痛い目見ずには済むんだから。」

こんな能無しの言ひなりにならないといけないのか。

吐き気がした。

それでも。

頭の中に流れる声にかけてみようと思った。

私はまだ死ねない。

殺してくれないのなら死ねない。

もしあなたが生きているなら。

絶対復讐してやる。

復讐は何も生まないって知ってるけど。

でも許せなかった。

目の前に生きてるのうのうとした軍隊の奴らが。

牢屋の戸を開けて騎士団長と呼ばれた男が入ってきた。
口元にはいやらしい笑みを浮かべて。

魔族には性別がない。

だから間の子の私は一応女として数えられたけど本当は中性だった。
きっと愛する人によつて性別は変わるんだと思つ。
いつもいつも学校でも好奇の目に晒されてたから。

だから私はこれから起くるであろう事が容易に想像できて。
怪我をさせられるのも怖くなかったけど。
でも目の前の男が怖かつた。

好奇の目に晒される事が堪らなく怖かつた。

手錠は外れない。
いくら暴れても。

来ないでっ！

叫んだつもりでも声すら出なかつた。
騎士団長が私の胸に触るか触らないかの時だつた。

「団長。 もうその辺で良いじゃないですか？」
さつきの私の頭の中に語りかけてきた男が言つた。

「折角いいとこなんだから邪魔すんなよ。」

騎士団長は意に介した風もなく。
私へ手を伸ばしてきて。

「いやっ……！」

私は何も出来なくて。

「やめろってんだ。」

地の底から這うような声で。

その声の主は騎士団長を掴み投げ飛ばした。

「お前。訓告ものだぞ！――！」

「じゃあ訊きますが。」

その声の主は私と騎士団長の間に立ちはだかり。

「あなたのこの行為は島流しものだと思いますが？」

ダマッテメヲフセルンダ。

また頭の中に声が響く。

私は小さくつむいた。

ぐつと黙る騎士団長と声の主との間に妙な沈黙が流れ。

「俺。しつかりとこの眼で見ましたから。

騎士団長。あなたがこの魔族にしようとしたこと。

凛とした声で。

その背中で私を初めて庇ってくれたのはこの声の主だった。

「煩い……！コリウス。

お前だって同罪にしてやる……！

騎士団長の特権だ。」

ほんの一瞬だった。

そう言う騎士団長の声が途切れ。

光がほとばしり。

騎士団長の首が飛んだのは。

「利かん氣なんだよ。」

ユリウスと呼ばれた少年が一いちを振り向き。

「逃げるぞ。」

ただ一言言つた。

逃亡

「大丈夫か？」

手錠を外しながらあなたは言った。

「何で助けてくれたの？」

私は死んでもいいって思ったけど。

覚悟は決めたけど。

犯されて生きるぐらいなら死んだ方がマシだと思ってたから。

オレモネ。オマエヨリイイゼンカラマヅクトマヅクトヒトトノアイノ
コナンダ。

頭の中に響く声は。

私の質問に応えてた。

でも口では。

「つてか今そんな事言つてる場合でもないし。

お前のせいでの俺はまた追われる羽目になつた。」

違う事を言いながら私の腕をつかみ。

「行くぞ。」

舌打ちしながら外へ出て。
羽根を背中から出した。

フリークスつて言うの？

呆然と腕を引つ張られながらそう思つと。
心を読んでたかのようにあなたは言つた。

「俺はクオーターなんだよ。人間と魔族と魔族の間の子。

だからお前より力を持つてる。」「

そして私を抱え大空へと羽ばたいた。

空も飛べるだなんて。

私はただ紫色の瞳をしてるだけで何も力は持つてないのに。

「何処へ行くの?」

「仕方ないからお前をアジトへ連れて行く。
そこで匿つてもうえ。」

「あなたは?」

「俺は軍隊だから派手に騒ぐぞ。
悪いけどお前は逃亡犯ね?」

「ええええ～～？」

「俺がクオーターなのみんな知らないからばれるまで軍に居て内部
から壊滅させてやるつもりなん
だ。」

魔王ピーシアは魔王なのに魔族の血が壊滅する事を願い。
勇者クーランに思いを託したのに。

私はこれだけ生きることに抗い。
死ぬ勇気もなく。

手は血塗られて。

罪は消えず。

園長先生が命かけて守ってくれたのに。
このザマで。

「私はこれからどうすればいいの?」

その答えは見つからなかつた。

そして私は。

連れてこられたアジトで二十歳を迎える。

丁度その時だつた。

人間が負傷したのを助けたのが。

光り注ぐ。

見た目はけつこう重傷だった。
手なんか焼け爛れて手を貸さずにはおれないほどに慘めだった。

「…君は魔族だね。」

その人が呟いたから。

「悪いか？」

そう言うとその人は微笑みを浮かべて。

「ああ。いや。

助けてくれて有難う。」

そう言った。

私を助けてくれたユリウスはあの後魔族の爆撃に巻き込まれ死んだ
と聞く。

私はそれを聞いたとき涙すら出なくて。

何だかこうなる事がわかつてたような気がして。

魔族は元々誰かを守る事はしないから。

それはハーフでもクオーターでも変わりはなかつた。

誰が死のうが生きようが。

魔族には自分が大事で。

自分がだけが富を得たら良いという思考しかないから。

穏やかなあなたは。

私へ薄く微笑んだ。

「俺はね。爆撃隊の少佐だった。

だけど内部からの反乱があつてね。

飛行機で飛んだけど撃ち落とされた。」

「争い」とに人間も魔族もないのかもしれないね。」

あなたは痛々しいその姿で呟いた。

私はどう答えていいか判らなかつた。

だつて殺人犯な私は人間は「敵」のはずで。

大好きだつた園長を殺したのも軍隊の奴らで。
私は復讐の鬼と化して。

だけど復讐が何も生まないこと。

きっと何処かで知つていて。

心に残つたのは罪深さだけだつた。

人を殺めてしまつたという後悔だけだつた。

園長が生き返るのなら私は人を殺めただけ罪を負うだけ報われた気がしたけど。

実際は全然そんな事なくて。

園長は生き返らなくて。

ただ残つたのは自分の血塗られた手だつた。

「君は何で泣いてるの？」

人知れず涙がこぼれる。

「俺が何か悪いこと言つたかな？」

あなたは穏やかな微笑みで。

もうきつと死期が近い。

「ごめんなさい。私。ヒーリング使えないの。」

助けたは良かつたけど。

私は紫の瞳以外人間と変わらず他のみんなみたいに力は持つてなかつたから。

「何で謝るの？君は俺を助けてくれたじゃない？」

それで充分だよ。」

焼け爛れた手であなたは私の涙を拭つた。

「俺ね。クーランって言うんだ。

昔の勇者と同じ名前。

勇者みたいに強くなりたくて軍に入つたけどこのザマで何の為に軍隊に入つたんだろうって思った。

魔族狩りをしても意味がないって知つてたのに。」

私は。

この人間を好きになつてしまつた。

魔王ピーシアと同じように。

死に掛けた人間なのに。

人を殺めた血塗られたこの手で。

初めてこの人間を助けたいって思つたんだ。

「君の瞳は紫なんだね。

魔王ピーシアの瞳と一緒にだ。」

私は初めて。

本当に初めてこの人間を助けたいって切に願つたんだ。人間との絆を求めたいって本当に思つたんだ。

その時突然私の全身が光り。

クーランに降り注いだ。

傷が見る見る塞がつていって。

私の体は光る事を止めず命が消えるまで光り続けた。

…それは魔族が人間との絆を求めた証。

私はそれで満足だった。

園長がいつか言った言葉。

「ユリシアが絆を求めたらきっと人間みたいになれるから。
私はあなたが好きだつた。

ヒーリングを使えない私が唯一出来たこと。

命を削つて愛したあなたに生きる命を与えたんだ。

「君の事名前も聞いてなかつたね。魔族のお嬢さん。
でも君は魔王ピーシアみたいに潔かつた。
ありがとう。」

クーランはその後この事を全世界中に伝えたといつ。

「俺の傷はね……。」

終。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966f/>

KIZUNA

2010年10月15日08時35分発行